



Title	「コンピュータネットワークとコミュニケーション」
Author(s)	吉田, 光雄; 中村, 真
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1991, 82, p. 36-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65937
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人間科学部 吉田光雄・中村真

月曜日午前9時、大学の研究室へ来てコーヒーを入れながら机上のパソコンを立ち上げると、6通のメールが届いていた。まず、重要マークが入ったメールを開くと、学部
の計算機委員会が今週の金曜日午後に開かれるという内容であった。私は計算機委員の
一人として、計算機室の維持管理を担当しているのであるが、計算機委員会の前に、各
研究室の助手に集ってもらい簡単なミーティングをしておかなければならない。委員
会で、学部学生の計算機利用状況を報告する必要があるからだ。210小会議室を、金
曜日の午前11時から30分間予約したい。人間科学部コンピュータネットワークサー
ビスの「教室・会議室予約」メニューを使い、210小会議室の予約状況を確認すると、
幸い金曜日の当該時間は空いているようだ。利用代表者、時間、利用人数、会議題目を
入力すれば予約は完了である。重要メールはもう1通届いていた。会計掛から、研究費
の報告期限が迫っているという連絡であった。最近では、会議をはじめ様々な事務連絡
がネットワークシステムを利用して送付されてくるため、送付漏れで知らなかったとい
う言い訳はもはや許されないのである。

さて、次のメールは図書室からのものである。先日貸出中だった本を予約しておいた
のだが、それが返却されたという連絡であった。図書の予約、検索、それに、返却延滞
時の催促等がネットワークシステムを用いて行われている。

残る3通は通常メールサービスからのものである。1通は3年生のK君からの質問で
あった。先日の演習で取り上げた、Rosenthalのeffect sizeについての文献を知り
たいということであったので、とりあえず、図書室の文献検索システムを利用するよう
指示しておいた。もう一つは、アメリカの共同研究者から実験の進行状況を報告してき
たもので、残る一つは東京の友人からのメールであった。9月に東京で学会が開かれる
際に、時間をつくって会おうという内容であった。人間科学部コンピュータネットワ
ークシステムは外部ネットワークとも接続され、今や、ネットワークを利用した通信は、
郵便は言うまでもなく、電話にも代わるコミュニケーションの手段となっているのであ
る。

人間科学部ネットワークシステムには、ここに簡単に紹介した機能の他に、ネットワ
ークシステム利用案内、公共掲示板、ワープロ文書やデータ交換用のファイル通信、電
子会議システム、さらに、全学生の授業登録や単位取得状況を記録した学生データベ
ース等が含まれている。もちろん教官、事務官、学生はそれぞれが自分自身のアカウント
をもっている。

というように、人間科学部のコンピュータネットワークの利用状況を紹介できればい
いのだが、と思いながらフィクションを書いた。このようなネットワークシステムは、
すでに一般企業ではかなりの部分まで実現されており、最先端の研究組織である大学に
も、早くこのようなシステムが利用できる日が来ることを願っている。しかし、希望ば
かりを言っても仕方がないので、現在の私たちのネットワーク利用状況を簡単に紹
介する。

コンピュータネットワークと言われてまず頭に浮かぶのは、情報処理教育センターを
経由するBITNETを利用した電子メールのやりとりである。実際、人間科学部におけるネ

ットワーク利用の多くは、BITNETを介したものだと思われる。私自身も現在、米国の研究者、カナダ・イギリス留学中の友人たちとのコミュニケーションの手段として、その恩恵にあずかっている。時差のため、ちょうど昼夜が逆転している地域間では、昼間にこちらから送っておいたメールに対する返事を、次の日の朝には受け取ることができる。特に急ぎの用件でなければ、この1日に1度のメールのやりとりで、かなり効率的なコミュニケーションを行うことができる。また、もし両者が同時に端末の前にいれば、数十秒から数分の遅れはあるが、疑似リアルタイムコミュニケーションも可能である。よく耳にする話ではあるが、私も米国の研究者との共同研究を論文にまとめ、それを雑誌に投稿する時に、電子メールの便利さを強く実感した。また、日本の大学間のネットワークについては、JUNETの利用者も少数ながら存在しているし、UTOPIAを利用した文献検索も行われている。

ところで、コンピュータネットワークという用語から、一般的にはパソコン通信を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。実際、趣味としてだけでなく、専門的な情報交換や、ディスカッションのためのメディアとしてパソコン通信を利用する人も増えつつあるようだ。人間科学部においては、例えば、丸善のマルネットを経由したアメリカ最大の出版物・学術雑誌のデータベースであるDIALOGの利用や、日経テレコムによる新聞・出版物等のデータ検索が行われている。

また、心理学関係に話を絞れば、例えば日本発達心理学会では、学会のコミュニケーション手段としてパソコン通信を正式に取り入れており、事務局などの住所にも電話番号やファックス番号と共に、ネットワークIDが示されている。ちなみに日本発達心理学会発行のニューズレター第3号では、「パソコン通信ホームパーティー」というタイトルの特集が組まれ、その内容はパソコン通信の導入から経験談まで様々である。具体的には、ホームパーティーとは個人利用の電子掲示板のことである、といった紹介や、その具体的な利用方法から、特定のテーマを掲げたサブグループによるホームパーティーの自己紹介（教育心理学関係の連絡板、社会心理学とコンピュータ、マッキントッシュのユーザーグループ、院生室等）、パソコン通信の楽しみ、といった記事が寄せられている。

さて、ここで紹介したものも含めて、学会関係者が利用するパソコン通信の機能は、主として電子メールと掲示板であろう。電子メールと掲示板によって何ができるかといえば、ユーザー1対1での情報交換やディスカッション（つまり、手紙のやりとり）、ユーザー同士、または、学会とユーザーとの1対多の情報交換（つまり、ホームパーティーや学会事務局からの通信配布等）、さらに、複数ユーザーが入り乱れての情報交換（つまり、電子会議）であろう。パソコン通信が、研究室、または、自宅のパソコンを用いて気軽に（例えば、手紙を書くことの煩わしさと比較して）利用できることを考えると、機能的には限られたものであっても、研究者間のコミュニケーションを促進する有用なメディアであるといえよう。

今後期待される機能のひとつに、大容量ファイルの交換がある。比較的短いコメントのやりとりである電子メールに加え、論文の原稿や分析のためのデータ交換などが自由にできるようになれば、パソコン通信は単に有用なというだけではなく、必要不可欠なメディアの一つとなるであろう。このように考えると、冒頭で書いたフィクションのような総合的なネットワークシステムが無理だとしても、せめて掲示板とメール機能のあるシステムができればと期待している。